

追悼

大河原春雄先生 のご逝去を悼んで

東京大学名誉教授 堀内亨 一

本年7月17日、当学会の名誉会員大河原春雄先生が突然逝去されました。享年81才でした。寔に哀悼の限りです。

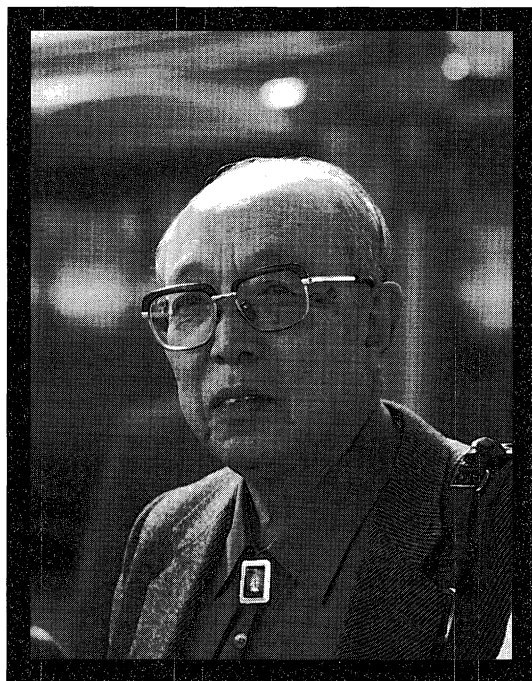
先生の御功績を思うとき、その学究的御生涯と一貫した御業績に今更乍ら感じ入ります。先生ほど行政と教育を通じて都市計画とこれに表裏一体の建築行政に終始され且つ実践された方は少なからうと存じます。

大河原春雄先生は、大正5年3月19日に金沢市に生まれ昭和10年地元の第四高等学校卒業後直ちに東京帝国大学工学部建築学科に進まれ、同13年優秀な成績で卒業されました。当時の都市計画講座は内田祥三博士（後の東大総長）の担当で、教授はこの講座に大変力を入れておられました。

諸外国の実態にかんがみ、都市計画の基本は土地利用計画の確立とそれにみあう建築物の用途・構造・規模等の規制と誘導にありと考えておられ都市計画と表裏一体のものとして建築行政を位置づけておられました。当時、建築行政は警察業務として扱われており東京では警視庁が所管し、市街地建築物法を執行していました。大河原先生は内田教授のお薦めもあったようで、卒業後警視庁保安部建築課に奉職され街づくりの仕事に踏み出されました。日支事変の拡大により時代は戦時色が濃厚となり、建築行政も転機を迎え鉄鋼等の軍需資材の使用統制や密集市街地の防火改修、軍需工場疎開の推進等にも従事されました。

昭和16年12月8日大東亞戦争が勃発し、東京の行政機構も変わり18年7月に都制が実施され建築行政は東京都防衛局に移管されました。まもなく大河原先生は召集をうけられ終戦による復員まで軍務に服されました。

B29の大空襲をうけた首都は、殆ど廃墟と化していたので復員された先生は資材配給や住宅復興に多忙を極められました。



故 大河原春雄 氏

本会の大河原春雄氏には平成9年7月17日永眠されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

社団法人 日本都市計画学会

昭和25年建築基準法が制定され、今迄と全く違った法体系となり地方条例の整備や新法令の運用等で先生は多忙の毎日でした。

建築局指導課長、同局総務部企画課長を歴任され昭和31年指導部長に栄進されましたが、建築行政の本流を進まれた訳です。その間新法令の適切な執行や新設の建築審査会の運営などに力を尽されました。昭和35年首都整備局の新設と共に先生は初代都市計画部長に任ぜられ、都市計画全般の責任者となられました。東京オリンピック開催を控えその準備も多岐に亘りました。

昭和39年には多摩丘陵一千万坪にニュータウンを開発する計画を立て、住宅公団・地元市町村等の協力のもとに事業が始まりました。都では南多摩新都市開発本部を設け、先生は住宅局技監からその本部長になられ未曾有の事業に取り組みました。今日、概成したニュータウンをみると、私

共も感無量です。

首都整備局技監を最後に昭和47年都を退職されましたが、その間東京大学より「容積地域制について」の論文により工学博士号を授与されており、また都市計画関連の著書を数多く執筆されました。

退職後は、東京理科大学の理工学部教授として迎えられ大河原研究室にて先生の実務に裏づけられた研究を通して若い学生の指導育成に成果をあげられました。

昭和61年それらの功により勲三等に叙され、瑞宝賞を授けられました。先生は益々御元気のように、囲碁・ゴルフ・菊造り等多彩の生活を送られておりましたのに寔に残念なことでした。合掌。

大河原春雄先生の業績

東京理科大学教授 渡辺 俊一

大河原春雄先生は、1916年、金沢市でお生まれになり、1938年、東京帝大建築学科をご卒業後、ただちに警視庁建築課へ就職され、戦後は東京都の建築行政から住宅・都市計画へと活動の幅を広げられました。

1972年4月、先生は永年の官僚生活に別れを告げ、新設まもない、東京理科大学理工学部建築学科の都市計画担当教授として赴任され、「都市計画」と「建築法規」を教えられました。

理科大へ赴任後の先生が、研究面で力を入れておられたテーマは「わが国近代の建築法規の変遷」です。その特徴は、次の3点にあると思われます。

第1は、建築法規の単なる法律論に止まることなく、その規定の技術内容にまで踏み込んで、それらが如何に歴史的に進展してきたかを明らかにされた点です。第2は、そのような規定内容の時代的・技術的背景を知ることの重要性を強調され、その点を追求された点です。第3は、建築法規の単体規定のみならず、都市計画・住宅政策との関連をトータルに押さえて、幅広い視野の下で論じられた点です。

これら研究の結晶が、鹿島出版会から1982年に出版された『建築法規の変遷とその背景：明治から現在まで』の著作です。これは、恩師・内田先

生の遺された「内田文書」を学生と共にコピーし、整理分析してまとめた労作であり、この分野ではほぼ最初の著作といえましょう。

先生が理科大で大活躍された、もう一つの領域は学生対策であり、そのご活躍の様は「余人を以て代え難い」と今も学園の語り草になっています。

1991年3月をもって、先生は理科大を去られ、悠々自適の生活に入られました。その後も年に1回、私どもの「建築法規」のクラスで特別講義をお願いしておりました。早朝、遠路はるばる野田キャンパスまでご足労下さり、60才くらい若い学生諸君に、ご自身の体験談を語るのを楽しみにしておられました。昨年11月13日にお越しいただいたのが最後となりましたが、当日も、度の強い眼鏡の奥に光る大きな眼、滔々と止まることを知らない弁舌など、非常にお元気で、かくしゃくたるご様子でした。つい昨日の出来事のように、懐かしく思い出されます。

先生の53年にわたるキャリア全体を拝見しますと、前半の34年にわたる官僚生活と、後半の19年にわたる理科大での学者生活とに2分されます。

前半の官僚としてのご活躍の部分は、わが国近代の建築行政・都市計画・住宅政策にとって、まさに「誕生まもなく続いた、苦悩の時代」でありました。その中で、内田・笠原両先生という、制度の制定者である「第1世代」から直接教えを受けた「第2世代」として、大河原先生は、その制度を充実させるべく、必至で走り続けてきた「歴史の証人」であるといえましょう。

後半の学者としてのご活動は、そのようなご自分の「原体験」を、じっくりと歴史のうちに確認すべく、史的体系化を目指した一生であった、と言えます。

特に、最大の自治体である東京都でのご活躍の足跡は、学問的にも大変貴重な史料であり、是非、記録に留めて保存すべきであると、常々考えておりました。お元気でしたので、何時でもお話を伺えると安心して、日々の多忙に紛れてその機会を逸しているうちに、先生は突如として「不帰の客」になりました。その貴重な機会は永久に失われてしまい、誠に痛恨の極みであります。

大河原先生、どうぞ心安く、お眠り下さい。大河原先生、ありがとうございました。